



研究開発の視点

理事 鳩谷 尚
東京研究所長

80年代は多領域にまたがる複合技術革新の時代であると思います。エネルギー資源開発技術、高分子機能商品開発、ライフサイエンス応用分野、情報革新と高次化学商品へのニーズ等々、これらは何れも多くの要素技術の集積、複合化した技術体系をなしているのであります。

複合技術革新時代に対応する化学工業企業の展開としては、化学工業の境界領域への浸透、他産業への転移への可能性に挑戦する研究開発に視点を置くことでありましょう。他産業群の動きは開発テーマと事業機会を色々な面で示唆しております。他産業の技術情報の理解が自領域での技術開発を進め、自社技術と他技術との複合化の中に新しい技術革新を創製するというケースがますます多くなるでしょう。既に化学工業における化学技術の構成比は、化学反応技術ウエイトは減少し、機能評価技術、成型加工技術、或いは変性応用化技術のウエイトが逐次高まってきており、機能化学品、商品化学品、高分子機能加工商品群の開発には、化学反応だけでなく、市場適応性判断のための変性応用、機能評価および用途開発の視点が欠かせないものとなっております。

この様な時代の潮流に対して技術革新を成功させるには、まず有効な情報交流をどう計るかがポイントであります。特に重要なのは研究者と市場開発担当者との相互のコミュニケーションであります。市場開発研究なくしては技術開発はありえないと思います。研究開発部門と市場開発部門との協力緊密化時代といえましょう。更に研究者自身が顧客の研究開発者との意志疎通を計る積極性が技術開発の効率化には最良の道であります。研究者のアイディアは、ニーズの認識がその解決のための技術的方策と結びついて発想されるものであるからです。企業の研究開発活動は、その開発効率化のため目的研究性が要請されると思いますが、成長ポテンシャルの高い研究テーマを求めて行くと、その研究対象は学際的であり、複雑であり、試行錯誤に対する理論の優位性を確立することが必要となります。企業の低下する基礎研究を補うには、これを大学研究に依存することにより、産学協同研究の実を挙げることを計らねばなりません。

現在の厳しい環境諸条件は、今後化学工業界で存続しうる企業と存続しえない企業との二極分化が起こる可能性を無視するわけにはいかないと思います。企業の将来をにらみ研究開発力が、この差別化の重要な手段であり、たぐみな情報解析の中で、どれ程他人より早く商品開発や技術開発の適切なターゲットを設定するか、それにふさわしい人材をいかに用意するか、これが研究開発戦略の出発点であると同時に最大の課題であります。